もう一度サクラ咲け

学校敷地内に植樹した本年度卒業生と保護者、桜ライン３１１のメンバー。震災後、同校にサクラが植えられたのは初めてのことという＝小友小学校

小友小で卒業記念植樹

桜ラインと共同で 流失した並木にかわり

東日本大震災の津波により流失した陸前高田市立小友小学校のサクラ並木。母校に再び美しいサクラを咲かせ、失われてしまった光景を少しずつ取り戻したいと、24日に同校6年生が卒業記念樹としてオオヤマザクラ2本を植えた。作業は同市のＮＰＯ法人桜ライン３１１（岡本翔馬代表）と共同で実施。同校へ津波が押し寄せたことに対する警鐘も後世へと伝える。

校舎1階まで津波被害を受けた小友小。学校を囲むように生えていたサクラは、正門前の2本を残しことごとく流されてしまった。これらの木々は30年ほど前に卒業記念で植えられたものが多く、今の児童の親世代が植樹した木もあった。

このうち昭和57年度卒業の同校ＯＧで、本年度卒業生の保護者でもある紺野直子さん（44）は震災で住居が全壊。津波到達地点にサクラを植えるという同法人の活動に賛同し自宅跡に植樹していたことから、「小友小にもう一度サクラを」と申し入れ、共同での記念植樹会が実現した。

この日は卒業生15人と保護者らが参加。まず岡本代表（32）が「植えて終わりではなく、どういう意味があるサクラなのかを伝えていってほしい」とあいさつし、一同は作業に先立って震災犠牲者へ黙とうをささげた。

植樹したのは浸水域が見晴らせる校舎北側の場所で、海風も強く吹き付ける。子どもたちはサクラが倒れないようしっかりと支柱を立て、獣害予防の保護カバーを巻いた。

卒業生15人は幼児期から一緒の仲良しメンバーだ。高田東中学に進むと広田小、米崎小の生徒も加わるため「この15人で一緒に何かするのはこれで最後」という思いを強く持ち、協力しながら和気あいあいと作業。親たちも「この木が大きくなるころ、この子たちはどうなっているんだろうね」と話しながら温かく見守った。

発災直後、同校の校庭や周辺の農地にはたくさんのがれきが流入し、付近から大勢の人の遺体も見つかった。「個人的には亡くなった方々への鎮魂の意味もあって植樹したかった」と紺野さん。震災が起きるまで自分たちの世代が植えた木について意識したことはなかったというが、今では「ここが再びサクラに囲まれた学校になってくれれば」と願う。

紺野さんの娘の優花さんは「私たちが入学したときからサクラがあって当たり前だったけど、お母さんたちが植えて大切に育てられてきた木が流されたと知って残念だった。大きくなったら自分の子にもこのことを伝えたい。みんなと一緒に作業できて良い思い出になった」と、寒風にほほを赤くしながら笑顔を見せていた。

2015年3月25日東海新報